

令和4年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 浅川 中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和4年4月19日(火)に、3年生を対象として、「教科(国語、数学、理科)に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語、数学、理科)

教科に関する調査(国語、数学、理科)

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

- (2) 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査

- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

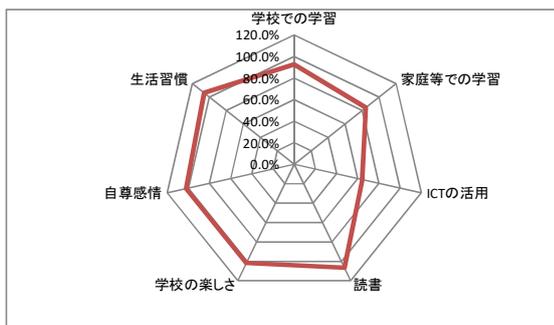
(1) 全国・本市の学力調査(国語、数学、理科)の結果

本年度の結果	国語		数学		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	9.3	66	6.6	47	9.8	47
全国	9.7	69	7.2	51	10.4	49

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	ほとんどの項目の平均正答率は全国平均、福岡県平均を上回った。特に、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の平均点は他項目と比べても高かった。また、無回答率は全国平均と比べほとんどの項目で下回っており、無回答が少なかったといえる。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	表現技法や心情を表す語句に関する問題の正答率が全国平均を大きく上回っていた。	
	努力が必要な問題	行書の書き方を理解する問題に対する正答率は全国平均をやや下回っており、「我が国の言語文化に関する事項」の理解について課題が残っている。	
数学	全体的な傾向や特徴など	平均正答率は全国平均と同程度であったが、事柄が成り立つ理由や解釈の説明等、記述式の問題の正答率は全国平均を上回っていた。反面、選択式や短答式の問題の正答率が全国平均を下回る傾向があった。	全国平均正答率との比較 同程度である
	よくできた問題	データの活用や数学的解釈等、思考・判断・表現を要する問題の正答率が全国平均を上回っていた。	
	努力が必要な問題	素因数分解や一次関数等の知識・技能を要する問題の正答率が全国平均を下回っていた。	
理科	全体的な傾向や特徴など	全国平均に比べ、「粒子」「生命」を柱とする領域の正答率が高く、「エネルギー」「地球」を柱とする領域の正答率が低かった。また、全国的に正答率の高い問題については全国平均をさらに上回り、正答率の低い問題はさらに下回るという二極化が見受けられた。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	「液体が気体に状態変化することによって温度が下がる身近な現象を選択する」の正答率が約54ポイントで、県・全国平均の約35ポイントに対して大幅に上回っていた。	
	努力が必要な問題	課題に正対した考察を行うためのグラフ作成や、静電気に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる問題の正答率が、全国平均を大幅に下回っていた。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
「学びの育ち」に関する数値は、ほぼ全てが全国平均を下回っており、中でもPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用したかを問う項目で、「ほぼ毎日」または「週3回以上」と回答した生徒が6.7ポイントと全国平均(50.9ポイント)を著しく下回っていた。一方、ほとんど全ての「心の育ち」に関する質問項目で、肯定的な回答が全国平均を上回っていた。
「自尊感情」、「生活習慣」、「読書への関心(好き)」については肯定的な回答が全国平均を上回っているのに対し、「自分の考えを工夫して発表する」、「自分の考えを深めたり周りに広げたりする」、「人と違う意見を考える楽しさ」、「友達と協力する楽しさ」などの質問の肯定的な回答率は全国平均を下回った。このことから、学習を中心としたインプットはしっかりとできてきているが、学習したこと等を自分なりにアレンジしたり積極的にアウトプットをしたりすることに苦手意識(自分の意見が周りから特異なものと認識されることに対する恐れ)があると推察される。また、その自覚しているが故に、調査では特に学びに関する質問の回答において、「他の人よりもできていないはずがない」と、肯定的な回答の低さに表れていると思われる。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

学力調査では国語科の平均が全国平均を上回り、数学科・理科は全国平均と同程度で下回る結果であった。ただし、数学科・理科においても、解釈の説明等の記述式問題の正答率が高かった。このことから読解力や理解力が身に付いている生徒が多いといえる。今後、理科・数学科の強化については、質問調査で肯定的な回答率の低かったICTを活用した学力向上に重点的に取り組む。また、読書に対する関心の高さは読解力・理解力の向上に繋がっていると考えられるので、引き続き本に触れ合う環境を整えるなど読書を推奨する取組を進める。授業中の発表や提出課題については生徒の個性を尊重し、単なる、正解・不正解に終始せず、チャレンジしたことやその過程を重視した声かけや励ましを教師が心掛け、生徒個人の独自性や表現力を伸ばすフォローをするなど、失敗を恐れずに前向きな学習態度を育てていく。

② 家庭生活習慣等に関する取組

「家庭学習の計画性があるか」や、「時間が十分に確保できているか」などの質問に対する、肯定的な回答率が全国平均より低かった。また、読書好きの傾向が高いにも関わらず、授業以外での読書時間は全国平均を若干下回っていた。反面、スマートフォンでのSNSや動画視聴の時間は全国平均を大きく上回った。規則正しい就寝時間や朝食摂取などの基本的な生活習慣の定着に係る肯定的な回答率が全国平均より高いので、携帯電話やスマートフォンに触れる時間の限度を設定させ、家庭学習や読書の時間がより充実するよう生徒・保護者への啓発に取り組む。